



海鏡子文自會 二



入達3
1947
2



13
1947
2



無飽三賊圖會卷第二目錄

異國人物

萬客之全圖

大盡目

粹我理

贅澤

雲天連眼

難間多連

粹奮

強我理

嫖客

畜獸類

寢狸

奉公猿

化連

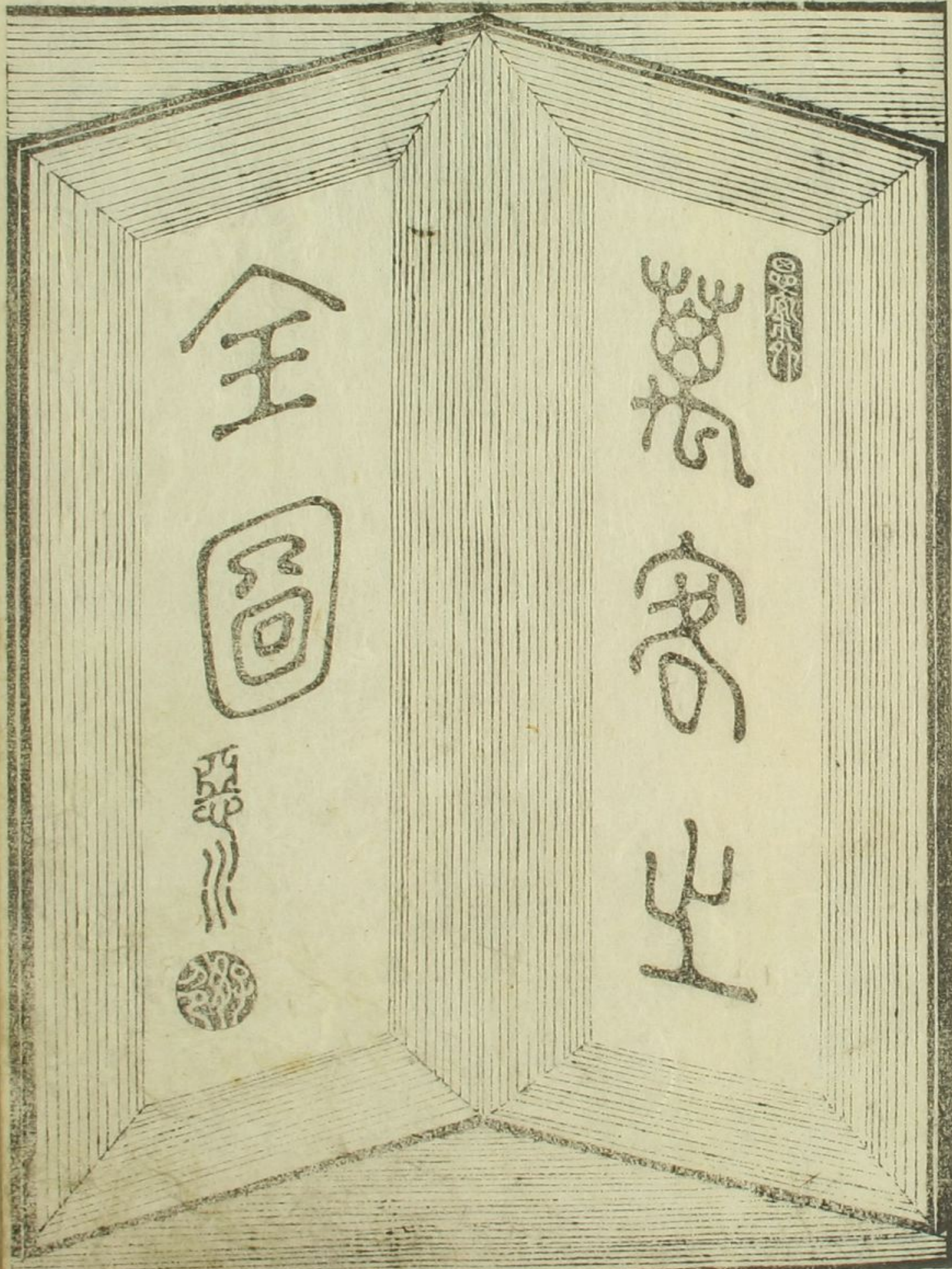
野氣種

大

毛通

苦累獅子

定
一 此會可致人
一 飛つては
一 三三三三三三三三
一 三三三三三三三三
一 三三三三三三三三
一 三三三三三三三三



禽部

親方鳥

便慶鳥

夜鷹

蟲部

髮切虫

口蟲

鯉

介貝部

憂名貝

紅葉貝

無二貝

ア二ノ貝

薰貝

油貝

甲螺

日柄蝶

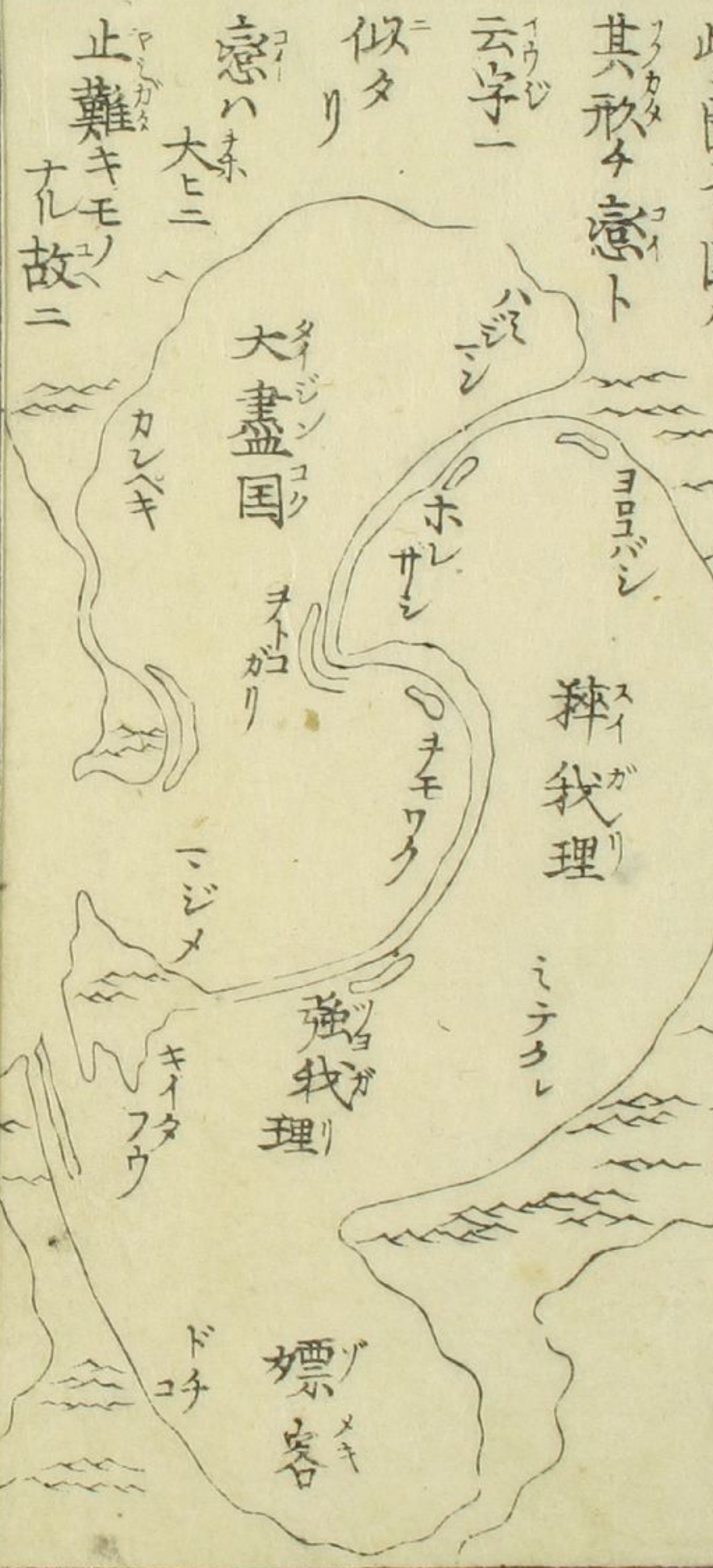
舌清蟲

萬客之全圖

大日本国ハ国ノ形蟾蜍ニ似タルヲ以テ
神武天皇始テ豊秋津洲ト号給フ

花街国

主目樓



嫖客

大不止徒国ト

號ス

難滿

四面ヲ憲之海ト

号テ思ノ濤洋ト

通人

レテ其廣大ナル更

タト難シ又國中ニ

雲天連眼

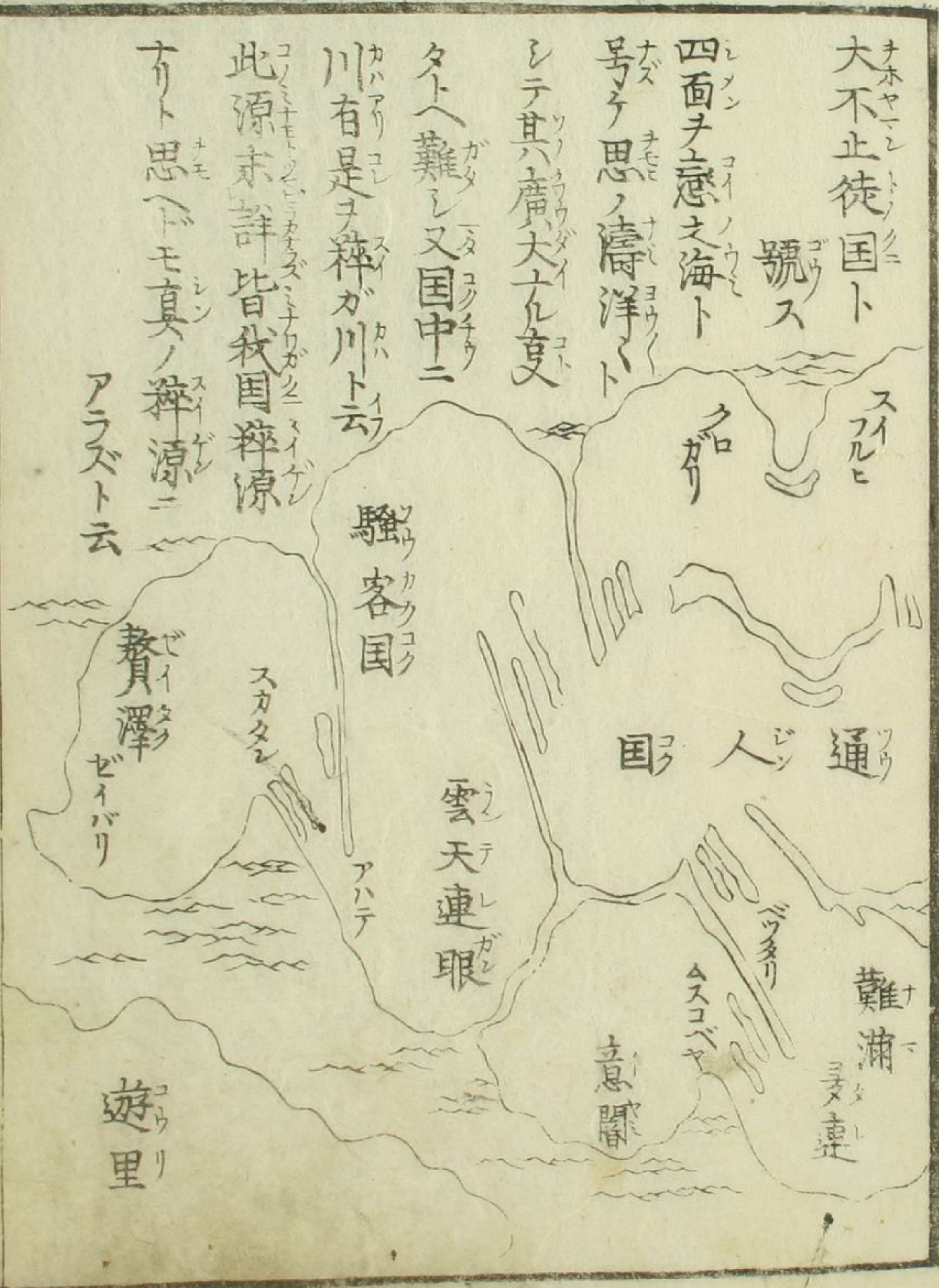
川有是ヲ穉ガ川ト云

騷客国

此源未詳皆我国家穉源
アリト思下モ真ノ穉源ニ
アラスト云

アラスト云

遊里



大盡国



一名モチマル

粹我理



一名ミテケレ

○大盡国一名モチマル
この
国人物柔れふして賤し
りば萬能ふ熟して活
氣あり假ふも各音の意
あく下を憐く悪言を吐
ど国富饒ある故十日の雨
日の居續ふ吉日樓娼家を
露一五日の風の便ふ花車中
居を忍うと月小酔花小貞

アニニ

雲天て連眼

又亞和天

驗客



贅澤

又贅張

敷加夢



酒池肉林ふあそびく娼
樂を忍ふあー太平を唱
ふ其国王を通人とり
其余。ホタヘスキ。チトコ
ガリ。ハミジレ。カレベキ
ホの分国あれども先大盡国
を鯨花第一の国と
○粹我理国一名ミテケレ
このくに人物至つて心

難 滿 彗



一名ベツタリ
又意闇

粹 奮



又クロガリ

強 秋 理



一名キイタフウ

狂い〜萬藝に通せん
こ〜も遂なる夏は
詩歌連詠の門兼を通
石印朱肉を調へたぐひ
惣ての藝是み等〜薬
罐藝と唱へ煮るも早く
涼るも早しと去へるれども
通人の分りおの〜近附の
如く罵り一回對する婦の
ア二ノ三

嫖 客



一名ドナコ

盡 夜 天 狗 風 吹 交 ち ら る こと

○贅 澤 一 名 「 ぜ い ば り 」 ス カ タ 止 「 何 ル ジ ヤ レ 」 這 国 悉
人 氣 あ 一 一 虚 言 を 専 と 一 火 術 を た 一 一 あ そ 終 日
衆 人 の 對 一 鉄 炮 を そ れ と 交 駁 一 一 世 間 の 惡 言 を
吐 唾 壺 よ り 蛇 を 中 へ 術 を お こ あ ひ 宴 席 小 者 を ち ち

悉く我を慕ふ心得我
国粹の源ありこ唱ふれども一
個の量見を立ち慢心を發
する故み風土より〜

輩友の馴染を買く慢心の鼻をいふく一化粧室の穴
を諷く音梅の仙人と思ひ哥妓娼婦の爪弾くらき
あぐり是を通人と思得る程の下国ふく国人の渾名を
千三萬八こ唱ふ

○雲天連眼一名アワテレアレダラレ這國ハ通人国ハ
遠く隔里一夷国あり堀首ふありく暗の下ふかく
宴席ふ有る須臾間も種あぶる未熟の小哥をうごひ
一二の舞を自慢な一両肌をぬぎく躍狂ふ至つて
騒くく諸支あく支もゆる人気が也

○難間琴連一名「イヤ」と這國の人物至つて癡鈍女を
看く涎を流し病有躬自一個めて遊ぶ支能くば琴くく々
余人小樂一もく夏あり簪の比翼紋小格氣を發し
肝積酒小長き夜を明の国風たるを然ども贅澤国とのハ
遠ひく人気が正直あり

○粹奮一名「クロガリ」這國ハ人物粹つる夏を専ら
一衣裳半廻りの器物も人の末ご用ひざる處をこの
流行小おくる夏を深く耻く言放しの詞歩行の格好小
近心を配り遊樂の席ふ整く落を執夏をユと唯已惚其六

目をおくる。子ヤラクラ。キイタフウ。ゴツボラ等の分国
ヲ

○強我理一名「ケチレ」這国の意地つよく惚て居を

が深くつゝ容子キ管も喰ぬ貞ふく使者めさく

義理誥の迫婦の言へや心の底ふいやく多く暗く

ぬ夏小金銀を費し未熟兵法小身の疵をたゆま

借馬より落て難波小通ひ負あぐるも強夏のもり

ちくを国風也

○嫖客国一名「ドチ」至つゝ下国ふして国人各々

アニノセ

本名を言ひして渾名をもよぶ己の使者の心少く其実を

強うば弱さ小當り強きを避るの人氣也全體小模様有て

鼻先小頬蒙をあし黄昏より出く小哥あんど声

高ふくこひ傍若無人小横行は這国早者寒を分る

腹當をあし暗雨とも足踏をらるゝ国外小スカシノチ

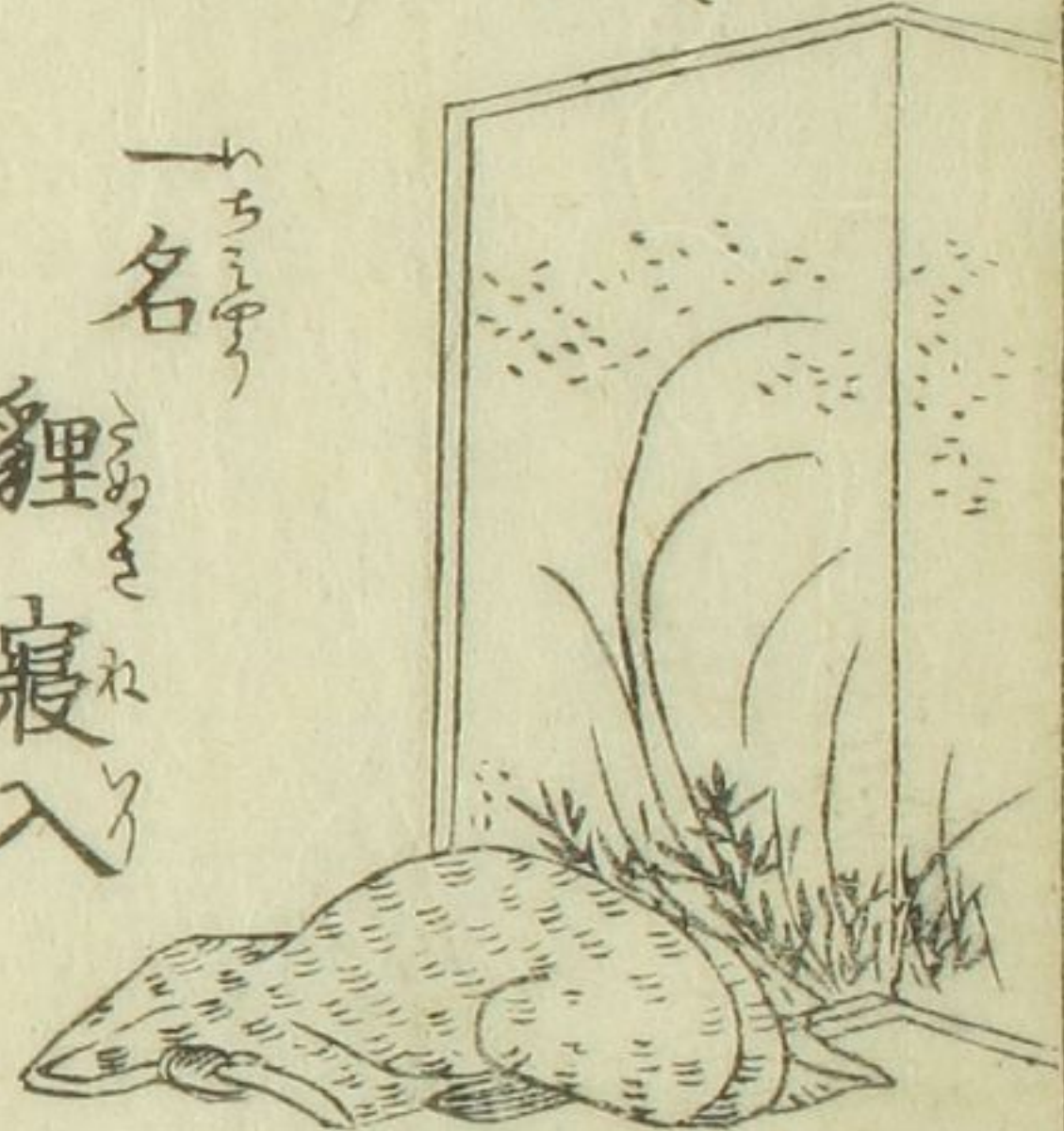
ヤシナイ。ホの国名あり

国産之部

○狸の蒲團の島小深く身をかくし下駄の音段揚

子の音をさく忽ち偽贗をあしゝ魅をくたぐゆふ

狸こね



一名いちごころ
狸寝入こねまゐり

獼猴びこう

俗よ
奉公猿ほうこうざる



麒麟きりん

俗よ
化連けれん

一名いちごころ
ツボラ
トモ云



種しゅ

一名いちごころ
野氣種やけしゅ



号あやく狸寝入こねまゐり云此時女狐このときメキツネ
来きつて是こゝを又誑あざむく其その狸こね
正躰ただたゝを顯あらわし遂つひに狐こねの交まじ
腹はら鼓つをうつて心こゝろを棄する
と云いふ三獸さんじゆを狐狸こねと云いふ故ゆゑ
此道このみち甚たゞく迷まよふをしらるるがら
と云いふ三さん。奉公猿ほうこうざるのち時とき
山林さんりんを山やま々々島しまのち是こゝ
を山やま々々と云いふらるらるら

ア二ノ六

鳥とりの水みづふたれるく自みづからら悪あく
賢けんく是こゝを後ご智恵ちゑと云いふ
かゝる時とき麻あしを追お西親さいしんの手て
みも合あははるる人目ひとめを忍しのん
ぶ菓くわを喰くふ号あやくつま
喰くうう喰くひひと云いふ
○化連けれんハ虚實きよじつ因いんの寸簡すんかん
濱ひら小生せうせいざる獸けものハは其その
声こゑハはちちちち舌したのこゑ

狗いぬ 又また 犬いぬ
俗よこ 犬いぬ 悦よろこ



狒ひ 狒ひ

又また 毛け 通つ
俗よこ 年とし 満みち



尋たづ 諸しよ 方かた 小こ の 虚うつ
言こと と 有あ る 故ゆ 小こ 化け 連れん 方かた
々々 と 云い う 古こ 又また 有あ る 古こ 語ご 小こ 化け 連れん
も 醉すい の れ 泥どろ 小こ 躍た る と 云い う
按お 是こ 是こ 願ねが 頭あたま の 聖せい 代だい 小こ 出で づ
之これ の 名な 小こ 人ひと 也なり
○ 野や 氣け 神かみ 北きた の 玉たま か へ 理り
牡ま の 玉たま 小こ 出で づ 故ゆ 小こ 野や 氣け
神かみ と 有あ る 一ひと 名な 。 タ ン キ 又また
アニヲセ

獅し 子し

一ひと 名な
苦く 累るい
獅し 子し



夏なつ 亦また 喰く ふ 之これ の 悉しつ く 口くち 小こ の 吐は け 其その 色いろ 青あお く 又また 土つち の
如ごと し 是こ 泥どろ 小こ の 生なま ぜ 故ゆ 有あ る 身み 小こ の 林はやし 小こ の 人ひと 小こ の 其その 羽う
木き の 葉は 小こ の 魚うい の 水みづ 小こ の 其その 鱗うろこ 波なみ 小こ の 似に 小こ の 成なり
然さ の 道みち 理り 小こ の 大おほ 悦よろこ 泥どろ 小こ の 生なま 小こ の 其その 色いろ 土つち 小こ の 成なり

○ フレキも云膽至つと六
く氣短うと故小此獸一
朝の怒ふ其身を忘る之
去へり
○ 犬の食物下小便をる

宜ありうんく之吠く水を飲更鬻く色を愛びるが
故小犬を犬吐して色を愛ると云る古語あり

○狒狒俗毛通云何この島も二三疋つゝあり華
山小育つ奉公猿年を経く狒とある人の氣をよく

取獸ふして是は出會者おやくい身をとうしあふと云

○獅子其種類多し「ムスコバヤより出るを波津加獅

子と云「ホレテル」より来るを宇連獅子と云「ヘン子」

より生むるを忌々獅子と云「ベツタリ」より来る阿徒

黒獅子以也良獅子「チマラクラ」より渡るを宇曾良獅

子と云「ナカ」タレより来る馬鹿羅獅子と号く「レウ

タレ」より出る加難獅子と云り此の圖をみる苦累獅子

と云く葦葉国無心城の邊小生ト尻火のつきたる時ハ

胸をびびりて食ふすまぐと云是獅子苦を報ひるべし

○此余番頭の白鼠江州より出る猫肥満国の豚あど

敷多あれども古又志もくれハ後篇小ゆとりく此の漢に

○葦葉鳥一名カケ鳥又留鳥書出鳥と云此鳥こび

めぐる時ハ惣て世間おどやあど別して遊里より来る

鳥ハ其毛色つゞく笑しと雌鳥也と云れざる此鳥人

節季鳥一名カケ鳥



辨鶏

一名カスリ鳥

夜鷹



一名ヒヘ鳥

鷓鴣

一名

爪長

又親方鳥



鷄

俗

宇津羅

又思鳥



家小入夏より一ノノノ若

飛入とも声高く囀るを

忌べし是乱の基也

○辨鶏ハ大盡国ハ近づく

又ハゴスコベヤをぞ来つ

国人をそののり一豊道の

酒池肉林ハそののひか

をを取ゆヘカスリ鳥云

必だも此鳥ハ近より夏

あられ心のまればら悪鳥を

る故詩も悪鳥かくる氣

がまればと云へるや

○夜鷹一名ヒヘ鳥黄昏

より濱辺ハ来つ浮氣

鳥ヤリめ鳥をまらり

多く咽み疵あり此鳥ハ

近づく者ハ濕毒をうけ

彼穿胸国のどく胸ハ

生ト又ハ頭小も穴の明度あり夜鷹の餌小ハ夜泣の
湿飢あどを食はるを薬喰と云

○鷓鴣ハ晝夜線香の花の下小すそて花の数をとぞ之
尋る時ハ笑をふくく少く時ハ眼を怒し子飼鳥を
白眼つも高く囀る声耳をけくぬく故くけくと
号く這鳥胸より肩へけけ尻あり其尖き夏能千の
如く一名欲の鷓鴣と云く小圖と云く雄鳥あれども
都く雌鳥おろし

○鷄一名思鳥と云雌鳥をふくく暮へも心小まらせば

我身小秋風の立く浮漚の粟ふるゆるかりひをれく
意草小ふくく忍びく只くくくくく日を送る也
宇津羅と云又片鷄と云くいと長と云くもの也

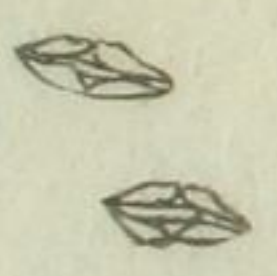
天牛

一名トク



口蟲

一名



螺

一名イラ



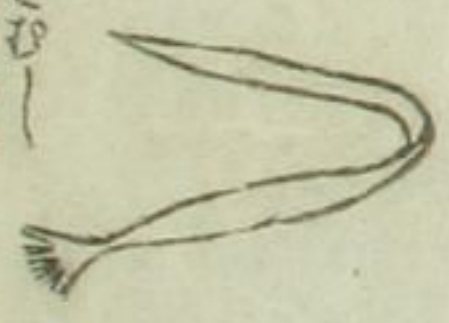
鳳蝶

一名日柄蝶



舌清虫

一名ウガイ



○天牛ハ娼婦の髪を喰切虫トヘ斯号ク娼婦ト云々
有ク切ハカハツク幸ハを得夏あり燒野ハ生む虫也
不意ハ飛来ツク喰らウ甚クハ命をウク一あり有
故ハ是を毒ト云

○鳳蝶一名を日柄蝶ト云冬十二月の末より生ト春正月
至リ飛めぐる夏夥ク人を見つるク洵マク去ルハ
こもり一跡をまめク痛むるク是をおそク人ハ其ハ
めぐる比ハ変ク通ル蟄クのち通ルト云
○口蟲一名口虫ト云クマクハ人目ある暗處ハ生レ

アニノ土

雌ハ色紅のどク黒ク光る齒あり又白もあり雄ハいろ
ろハ赤ク一七齒白ク雌の虫ハ舌をウク或ハ腕類
あぶをウク夏あり其毒氣腹中ハ入ク心氣を動シ
身をウク一あり大夏ハ至ル夏有此虫ハ近づくとの
心得をクベク此虫朝夕ハ水をウクク其齒をウクク
齒のすま間ハ麻苧の類ハを通ク一清むる夏ハ
罍家ハもあまク生むク之をかんごハ清らウク口虫生
むる夏花柳の街ありハ一編者も是ハハのや
あハ感心ク一筆をウク

○舌清蟲シロコトの夢ゆめに花街はなまちの井邊いへに生なまどがしらの色いろの
 ごとし朝夕あすけ娼婦ぢやうぶの口くちに入るいれる時とき、首くびを志しがめらう、
 夏なつあり一名いちめいを柳やなぎの虫むしとす

○鯉こいしのいづれの人家とんちやにも有ありくくやくつとくさる虫むし
 あり故ゆゑつむしとら然しかども至いたつ身みの為ためとありてよき
 虫むしあるを若わかさ人ひとあやうつは是これを忌婦よめと夏なつ甚しし
 是これ良よ薬くすり口くち小ちひ苦くさあひあれば此この蟲むしのつとくを
 辛しん抱いだし身みをおさむる人ひとの其その身み堅かた固こちるべし

○蜺なまこ俗しやくに死身貝しんみがいとす浮世うきよを秋あきの比ひみ至いたり意いのふち

死身貝しんみがい
一名いちめい

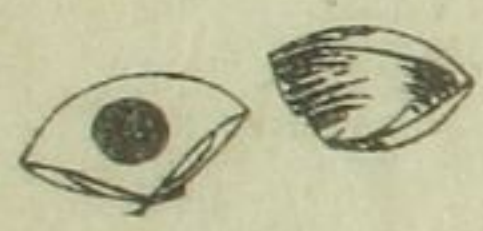
憂名貝うれなみがい
一名いちめい

紅葉貝こうじやがい
一名いちめい

磨貝まがい

俗しやく無む二貝にがい
吸出貝すいしゅつがい

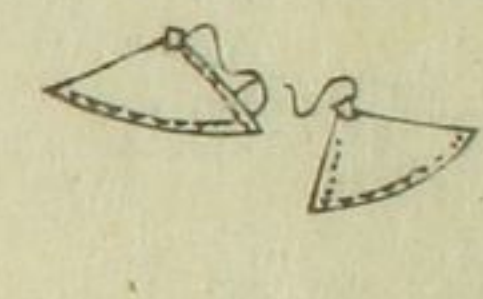
ト云



瀬せ又また義理ぎりの海うみふく思おもひの
 川か水みづのすぬぬ取とり生なましはら
 浪なみの心こころふくせびし其その身み小
 迫せまり五ご更まふ身みく死しすと
 つ又また死し損そんふも有あり故ゆゑ憂うれ名な
 貝がいとも云い真珠しんじゆと号なづく
 ○紅葉貝こうじやがいの風呂ふろの湯ゆ島しまの
 生なまし白しろ泡あわをふき出だす貝がい
 みく至いたつ清きよさとのあり

薰貝

又 白貝



俗

懸香貝

トモ云

油貝

一名

銀出貝



甲螺



一名

雛妓髪

故小島子の蟹の子拾ひ

ころり身を清むる貝と云ふ

一名を磨貝袋貝といふ鼠

是を好んぶ喰ふと云

無二貝俗吸出貝といふ紀

列濕之海より出る貝あり

よくそのを吸ゆへ小斯号く

相州の濱邊は是を多く拾

ふと云傳へり

○白貝の肌身の浦の産也其色紅めて白ひ有るれを
聞者たちも心をと動し氣を棄つれ魂身は漆ほど

又

○銀出貝の磯邊の松が根小多く有肉の貝小一ふ有る
よく白ふ是をとりし髪小付るはよく光澤をいづるを

故小油貝といふ松が貝も云色青有又黄あるも有

○甲螺の其色黒く油氣ありて女の髪小似たり女護

島の淨瑠璃小蟹人のころ榮螺のまりのぶるく鬚も

ころりも這甲螺の類也年若る蟹の子多く是を持

ろくろ 故小甲螺女も号くま

○ 餘紙有あまふまうをく 近刻きんこくの新著しんしやくを述のぞぶ

○ 春霞はるがすけ楮名い廻の篠原すいけ 曉鐘成編 并畫 全五冊

○ 小倉百首類題おぐらひゃくしゆるいだい新しん 全三冊

○ 春情しゅんじやう雪ゆきの東風菜あづな 全六冊

無飽三賦圖會二之卷終あらぬさんびづえ

ア二ノ十四

目録 巻

